

北海道の美しい山とイキイキした森林づくり



川床典輝

東大雪山系とエゾ・トドの天然林

北海道は、山と森林で栄えるところだとつね日ごろから考えている。それは私が、森林を相手にする職掌柄からだとは思っていない。私が旅をしたアメリカ・カナダでも、北にいくほど森林が多くなる。約二カ月の旅行中、その大半は北緯四〇〜五〇度の森林を見て回ったからである。とにかく、温帯北部から寒帯にわたっては、その気象条件から林業経営が、もっとも適している産業であるといつて間違いないようである。

北海道には国有林が三一〇万haもあり、公有林・民有林などをあわせると、森林が五六二万haもある。全道面積七八五万haとして、七二%もの森林面積である。こんな点から、山や森林をどうしたら、もっとも風土に適した発展をさせうるか、しみじみ考える一人である。

北海道の山歩き

去年の春から今年の九月にかけて、私は北海道の山歩きをはじめた。それは、私の職場である帯広営林局管内には、日本で一番めぐまれた森林がある、道内で一番めぐまれた国立公園がある。山や森林や湖が多い、こういう自然を私の目で見、足でたしかめ、そのあり方を考えたい。北海道にはじめての私は、当然

しなければならないことだと思った。

まず、私は、知床国立公園の羅臼岳を北から南に横断したり、テント泊りでルサ川からルシャ川に山越えした。斜里岳に登った。阿寒国立公園の中心である雌阿寒岳を踏査した。大雪国立公園の主峰・旭岳から忠別・五色・沼の原を歩いて、また、ヌブントムラウシを二泊のテント泊りで踏査した。ニベツツ岳にも登って、トムラウシ帯の森林を調べた。石狩岳はシユナイダーコースから登頂して、かつての風倒木の現状を見た。ウベペサンケに登って、高山地帯のきびしさや森林ことに笹生地問題をあらためてみせつけられた。芽室岳や楽古岳に登って、日高山系の広葉樹林や笹生地などに、新しい経営上のあり方を考えた。

「澄みきった青空を去来する白雲の悠久さ、夏の雪溪の涼しさ、カレンなコマクサのアデな美しさ、シマリスの姿やナキウサギの声に思う生きるきびしさ、何百年もの風雪にたえているハイマツ群の逞しさ、アイヌのいう沼や、湿原のある霊山ヌタツクカムシユツベの雄大な山々、エゾマツ・トドマツの広大な原生林」

私は、こんなふうに北海道の山々を、なにかの雑誌に書いたことがあった。そしてエゾキスゲのお花畑に求めた一夜のしとねをなつかしんだ。山を歩く若者たちの体臭

を限りなく頼もしく思ったりした。こうして計画的に山歩きをしていくうちに、道東の山や森林はいろいろのことを私に教えてくれた。

守り育てたい北海

道の美しい自然

全国的にみて北海道の山は、まだ、よく残されている。東大雪などは北海道の屋根として、そのまま原始の姿を残している森林も、おそらく、北海道でも唯一の原生林の姿をとどめているといえるだろう。

私たちは、ことし地域施設計画といつて、国有林の経営計画をくんでいるが、これらの地域は貴重な自然の資源として、永久に守り保存していく仕組みをつくりたいと考えている。一度こわしたら、永久にかえつてこない自然の貴重な資源は、まだまだたくさんある。知床半島もその一つである。道路など、いまからよく検討し入れることにして、あの美しい自然や番屋など古くて新しいあの地の人々のくらしも残していきたいと願っている。摩周湖や屈斜路湖の周辺なども、自然教育の場としていきいたいものだと思う。阿寒湖の周辺も、私は美しい山に育てる手をうっているつもりである。

だいたい観光地といわれるところは、ほとんど国有林地帯である。自然保護の仕事も、私たちのたいせつな仕事である。私たちは自然休養林といって、国民のレクリエーションの場を、国有林自身でつくろうともしている。健全なイコイの地を、オンネトーとか然別湖とか、いろいろの地に計画している。そんな意味でも国有林のあり方に、深いご理解と、あたたかいご協力をいただきたいとねがっている。

イキイキした森林 づくりこそ北海道 の生きる道

いままで
私は、森林
というより
山歩きなど
を中心に、北海道の美しい自然をいかに守り育てるかを考えてきた。けれども、すでにふれたように北海道は森林天国であり、林産王国でなければならぬ自然条件のところにある。こういうめぐまれた立地条件にあるのだが、現状はどうなっているのだろうか。

北海道の歴史は開拓からはじまった。森林はジャマモノだった。森林を焼き払うことが北海道の開発になった。おそろしいもので、いまでもこの思想がつながって、森林はいくら伐つても、丸太はつきからつきとでてくるものだと思う。こんな

考えが林産業界の人々の心のすみになかったとは、いぎれないようである。昭和二十九年以来の風倒木処理や工場の増設などで、林産業界はなにかアンバラな形になってきたのが現状である。

私は、東北北海道の森林調べで、「苦しんでいる木」「痛いといっている木」が、放置された天然林のなかに多いのにおどろいた。皆伐しているところは一斉に造林しているが、生長量は予想したより多くないし、いろいろの被害が多いのにもおどろいた。

これではいけない、一体どうしたらよいのか、山を歩き、森林を見て、一生懸命、青い鳥を求めた。エゾマツ・トドマツも知らなかった私は、急に目のまえにエゾマツ・トドマツが大きく迫ってくるのを感じた。エゾマツ・トドマツの教えをうけ、先輩にご指導をいただいた。そして北海道の林業を育てるのは、エゾマツ・トドマツを主体として、満度に人力を加えた、いわゆる天然林づくりしかないと思つた。しかしこの山づくりには、われわれの姿勢がもっとも大切である。森林はいうまでもなく、イキモノである。何百年も生きつづけ、生長をつづける巨大なイキモノである。

私たちは、この巨大なイキモノの社会を深い愛情で見守り、育てていかななくてはな

らない。その愛情で育てられた美しい森林社会こそ、私たちにつきない泉のように、たくさんの果実を永久に与えてくれるのである。北海道の栽培林業とは、本州のようなスギ・ヒノキの一斉造林とは本質的に異なる自然風土の体質をもっている。キビシイ自然条件に適した天然林を育てることが、もっとも大切な基本的な条件なのである。

愛林施業の山づくり

こういう
ことを教え
られた私は、愛林施業という仕事に対する私たちの姿勢を打ち出した。そしてこの愛林施業をすすめる体系づくりとして、仕事のしやすいい林道網を早くつくること、ことに施業林道といって、haあたり五〇〜一〇〇mもの林道をつくって、愛林の手が林内どこにもとどきやすくすることを、まずすめた。こうしてゆきとどいた選木や植込みができるようになり、イキイキとした山づくりができる基礎が自然と固められる。

こうして従来、ha二m²くらいの生長量を六m²くらいにあげることが、むずかしいことではない。このことは、北海道の仕合わせにつながる大切なことなのである。私のおおずかりしている国有林七二万haのうち、五二万haが天然林である。このう

ち、さきほどふれた高山地帯やレクリエーション地帯、さらに保安林など、間接的に経営していくところをのぞいても、四〇万haくらいは上手に、いわゆる天然林を育て、その果実をいただかなくてはならないところである。もちろん愛林施業は、手のとどぎにくいエゾマツ・トドマツを主体とした天然林に、まず手をつける。とくにここで強調しておきたいことは、トドマツは上手に育てると、スギなどに劣らない大きな生長量をもつ偉大な北海道の木である。北海道に住む私たちでもこのたいせつな事実はとかく忘れがちなので、広く関係者に知っていただき、とくに愛林施業にもとづく天然林づくりの有利さを知っていただきたいと思う。

これまで、いろいろと申しあげてきたように、山と森林のあり方として共通していえることは、山は自然をこわさないで、たいせつに守り育てていかななくてはならない。森林は、人工を大いに加えて価値のたかい、いわゆる天然林づくりをしていかななくてはならない。美しい自然を守り、自然に順応した立派な天然林を育てることこそ、北海道でもっともたいせつな山と森林のあり方だと思う。 — 四四・九・二八 —